



Title	トウルファン文書を読み解く : 文書に見える冥界の姿
Author(s)	荒川, 正晴
Citation	月刊しにか. 1998, 9(7), p. 58-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88457
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

トウルファン文書を読み解く

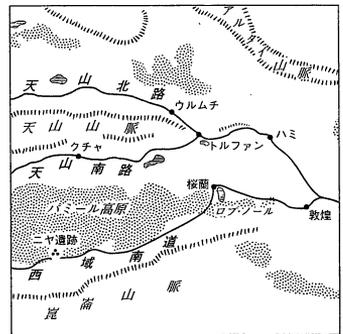
文書に見える冥界の姿

荒川正晴 (あらかわ まさはる)

●トウルファン文書とは

今世紀初頭に莫高窟より発見された敦煌文献が、第一級の資料群として、中国および中央アジアの歴史・言語・文学・思想など、広範囲におよぶ諸研究に多大な学問的恩恵を与えてきたことは周知のとおりである。実はこれとほぼ比肩し得る文字資料群が、敦煌の西北方に位置するトウルファン・オアシスでも見つかっている。トウルファンでは、同じく今世紀初頭に、列強の探検隊による調査活動が本格的に始められ、新中国成立後も積極的に発掘作業が行われてきた。この結果、多くの文字資料が蓄積されており、とくに一九五九年〜七五年にかけて行われた中国考古隊によるアスターナ・カラホージャ古墳群発掘では、総計二七〇

〇〇余断片から一七〇〇点を優に越す漢文文書(仏典をはじめとする典籍・著作類を除く公私の世俗文書)が出土している。最近でも、一九七五年以降に発掘・発見された一〇〇点におよぶ文書(ただし典籍を一部含む)が公表されており(柳洪亮『新出吐魯番文書及其研究』新疆人民出版社、一九九七年)、典籍以外の文書といふことになれば、点数的には敦煌文書を凌駕することになる^①。トウルファン文書の研究が、今後、ますます重要となつてゆくことは疑いない。トウルファン文献は、敦煌文献と異なり、寺院址をはじめとする諸遺跡や古墓群の墳墓より出土したものが主体なので、形態的には剪裁された断片的なものが多いが、内容的には却って歴史研究に有用な世俗文書が大半を占めている。



る。年代的にも、漢文文書に限って見れば、前涼の升平十一年（三六七）〜唐建中三年（七八二）にわたる紀年文書が認められ、主に九〜一〇世紀に偏る傾向にある敦煌漢文文書と、相互に補充する側面を有している。現在でもトルファンには、調査が及んでいない墳墓等が多く残されているので、今後もしさらに新たな文書史料が発見される可能性は高い。

●古墓群と出土文字資料

こうしたトルファン出土文書、なかでも漢文文書の宝庫は、なんと言っても盆地に散在する古墓群の墳墓であるが、そこには被葬者の衣服や靴などに二次利用されることよって埋納されたものと、はじめから埋納する目的で納められたものが存在する。例えば後者の例としては、墓室内より出土する随葬衣物疏そくと呼ばれる呪術文言（いわゆる移書）を付した副葬品リスト、辞令書である告身、追贈の木表、儒教經典の『孝経』、契約文書類などがある。さらに多くの墳墓の墓道には、墓表・墓誌が文字面を墓道側に出さないようにして、その側壁にはめ込まれている。

二次利用されて納められたものは、公私にわたる世俗文

書がほとんどであり、当時のトルファン、さらには中国の社会・経済・文化等に関わる様々な情報を我々にもたらしてくれる。その一方で、はじめから埋納する目的で納められたものは、トルファンに生きた人々の冥界観がそこからうかがえ、彼らの精神世界に迫ることができる。中でも、冥界に旅立つに際して特別に葬送用として作成されたものでなく、現世において既に作成され機能していた、告身、『孝経』、契約文書など（ただしこれらの中には埋葬時に副葬用として複製されたものもある）は、現世と冥界とを繋ぎ合わせて捉える上で貴重な史料となる。

●トルファン漢人の冥界観

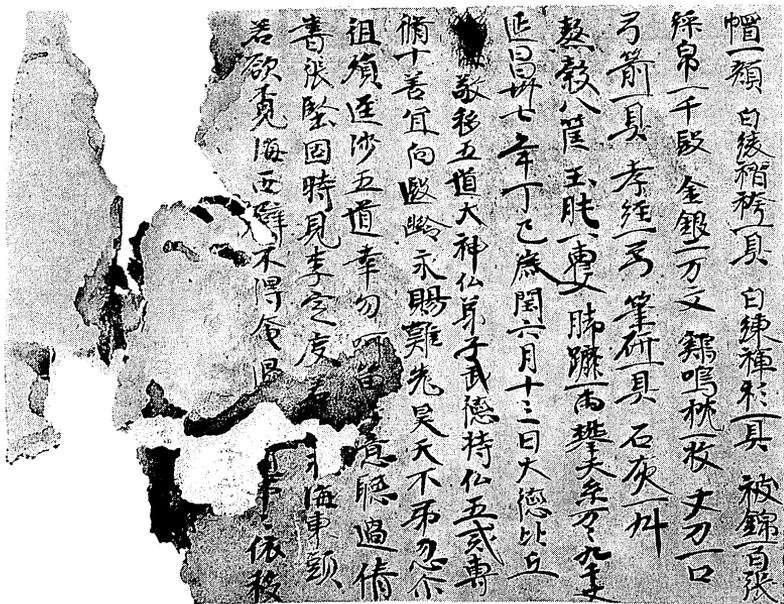
冥界という、この世ならぬ異次元の世界を前提とするため、我々の合理的な解釈がどこまで適用し得るかわからないが、現代人とは異なり、当時トルファンに生きた人々が、他の同時代人と同様に、現世の生活の後に死後における生を信じていたことは疑いない。ではどのような世界と考えていたのか。

この点については、先に掲げた随葬衣物疏に付された呪術文言が、六世紀はじめにトルファンに建国した麴きく氏高

昌国の士階層の人々のそれについて、その一端を教えてください。⁽²⁾ その表現は書式として定型化したものではあるが、ここでは被葬者の多くは「仏弟子」と表明され、彼らが生前「仏の五戒を持ち、専ら十善を修めた」ことが記されている。こうした彼らの冥界への旅立ちは、この呪術文言では、まず「大徳比丘」が冥界の神である「五道大神」に対して、故人が「五道」を自由に通行できるように依頼することから始まる。そしてこの「五道大神」に対する依頼文の作成と保障を行っていたのが、「李堅固」「張定度」といった神仙であった。「五道大神」はこの依頼を受けると、「五道」を「逕涉(経涉)」する(わたる)ことを認可する判辞を下すことになり、故人はこれで安全に冥界へ旅立するというわけである。この「五道大神」については、同時期の中国内地におけるそれと併せて検討しなければならぬが、ただ呪術文言全体を通して見ても、この「五道」なるものが、いわゆる地獄・餓鬼・畜生・人・天を指すものなのか、単に方角としての五方を指すのか、はたまたそれ以外のものなのか、判断することはかなり困難である。麴氏高昌国において麴氏王家を中心とした鎮護国家的な仏教信仰が盛んであったことは、ここに立ち寄った玄奘の報告

からもよく知られているが、少なくとも、この国における「仏弟子」たる士人が実際に信じた冥界は、中国内地の漢人と同様に、いわゆる儒・仏・道、三教が複雑に絡まった上に構築されていたと見るべきであろう。⁽³⁾

また、この随葬衣物疏は、こうした冥界への通行証としての性格から、被葬者の衣服の内など、最も遺体に密着して納められていた。先に掲げた埋納される目的で納められた文書も、出土状況が確認できるものは、被葬者に近接して納められていた。例えば、左懂憲（せいようけん）という高利貸しの墳墓に埋納された契約文書は、まとめられて被葬者の腋に置かれたり、またトウルファンの名門・張氏一族の末裔、張無価の告身も広げて胸元に置かれていた。おそらくは、邪気を払う呪符的な働きもある『孝経』⁽⁴⁾も被葬者に近接して納められていたものと考えられる。被葬者は、通行証だけでなく、これらを伴って冥界に渡る場合もあつたのである。このうち契約文書に関しては、アメリカのハンセン女史がこれが埋納される意味について、先の左懂憲のそれに基づき次のように結論する。⁽⁵⁾ これらは、現世ではその役割を終えているものの、冥界ではなお機能し得たものである。即ち、現世では履行されなかつた契約の実現を冥界におい



トルファン出土の随葬衣物疏（高昌延昌37年〔597〕武德随葬衣物疏）

て果たすために、冥界の法廷に提出する証拠書類としてこれらを埋納した、と。ただし、ハンセン女史は触れていないが、左憧憲の墓以外にも、埋納する目的で納められた契約文書が認められるが、そこには被葬者が契約の当事者になっていない（とは言ってもおそらくはその一族のものが関わっている）ものや、実物ではなく副葬用に作られた可能性があるものがあり、こちらは直ちに冥界の法廷に提出するためと判断できるわけではない。

ところが、やがて高昌国が滅亡して貞観十四年（六四〇）にトルファンが唐の支配下に置かれると、先に掲げた随葬衣物疏は消滅し、かわって功德疏・功德牒ちんぎょうが作成・埋納されるようになる。このことは、単にオアシス独立国家が消滅したというだけでなく、それまで保持していた人々の冥界観までもが影響されていったことを意味している。即ち、唐支配下において作成・埋納されるようになる功德疏・功德牒には、それまでの随葬衣物疏に見られた冥界の神である「五道大神」はまったく現れず、かわって浄土への往生を願う故人が、生前如何に「写経・誦経・布施」等の功德を積んだかを記すなど、浄土信仰というものが明らかに反映されている⁶¹。このことは、七世紀の唐支配

時代になってから、トゥルフアンに浄土信仰が一般に深く根を張り信仰されていったことを示唆している。

この随葬衣物疏と功德疏・功德牒との交代の時期を具体的に見るならば、高昌国滅亡後の十数年間、つまり永徽年間頃までは、書式は以前の衣物疏に則りながらも「五道大神」の名はまったく消失してしまい、そしてその後、咸亨年間頃に功德疏・功德牒（前掲の左憧憲の墓に納められた「唐咸亨四年〔六七三〕左憧憲生前功德及隨身錢物疏」は衣物疏から功德疏への過渡的な形態）が納められるようになる。

実はこうした浄土信仰の深まりは、近年ヤールホト古墓群より出土した唐代の墓誌（咸亨五年〔六七四〕、張歎□）にも認められることができる。この墓誌は、ヤールホト古墓群に埋葬された漢人のなかでも上層クラスに属す張氏一族の塋域（一族の墓域）より出土したもので、その一節には、それまでの墓表・墓誌では見られない「一旦無常、生於浄国」なる表現が記されている。

こうした唐支配下における浄土信仰は、唐がトゥルフアンを直接的な支配下に組み込んだことと深く関係すると推測できよう。ただし浄土信仰そのものは、それ以前の麴氏高昌国でも、王族レベルにおいては既に見られ、そのこと

は「きくひん麴斌造寺碑」や高昌国の滅亡直前に書かれた「高昌王女写維摩詰経」題記（スタイン二八三八号）などからうかがえる。

なお先のヤールホト出土の墓誌には、「二鼠」「四蛇」という表現も用いられているが、これは人命の無常迅速なることを表現した仏教経典（「寶頭盧為優陀延王說法経」「仏說譬喻経」等）に見えるもので、黒白二鼠は昼夜あるいは日月にたとえられ、四蛇は四大（一切の物質を構成する四大要素）を表すと言われる。この表現は説話とともに、東西世界に伝播し、東は中国より日本へ、また西はヨーロッパへと伝わっていった。

トゥルフアンにおいて、この比喩表現が墓誌に使われたことは、唐のトゥルフアン支配にともなう中原仏教文化の流入と無関係であったとは見られず、唐以前の儒・仏・道三教が複雑に絡んだ冥界観から、浄土の存在を強烈に意識してゆく時代への移行とも連関するものであったと考えられる。

唐支配以前におけるトゥルフアン漢人の冥界観が、浄土信仰が浸透してゆく中で具体的にどのようなように扱われていたのか、詳しくは今後の検討に俟つほかないが、少なくとも

も冥界のビジョンがドラスティックに変化したとすれば、それは現代人が考えるよりも遥かに「革命」的なことであったことは閑却すべきではなからう。

【注】

- (1) 池田温「正倉院文書と敦煌・吐魯番文書」、『正倉院文書研究』五、一九九七年、一三五頁。
- (2) 白須浄真「随葬衣物疏付加文言（死人移書）の書式とその源流」、『仏教史学研究』二五―二六、一九八三年、七二―九九頁。
- (3) 小田義久「吐魯番出土葬送儀礼関係文書の一考察」、『東洋

史苑』三〇・三一、一九八八年、四一―八二頁ほか。

(4) 嚴耀中「魏氏高昌国时期的《孝經》与孝的觀念」、『中華文史論叢』三八、一九八六年、二七五―二八二頁。

(5) Valerie Hansen, *Negotiating Daily Life in Traditional China*, Yale University Press, 1995.

(6) 王素「吐魯番出土《功德疏》所見西州庶民的淨土信仰」、『唐研究』一、一九九五年、一一―三五頁。

(7) 一九九四年～九六年にかけて行われた早稲田大学と新疆考古研との共同調査の成果による。まもなく正式な発掘報告が中・日双方で公表される予定である。

(大阪大学・内陸アジア史)